

『信仰の平和』におけるタタール人像*

—— クザーヌスの東方への眼差し ——

八 卷 和 彦

ヨーロッパにおいて、「タタール人」という名称はけっして価値中立的ではなかった。むしろ明らかに否定的な意味を帯びていた。それは十三世紀におけるタタール人の侵攻以来のことであり、十六世紀にいたってもマルティン・ルターが次のように「卓上演説」の一つで述べているとおりである。「私は徒歩傭兵というものが大嫌いである。彼らに守ってもらうくらいなら、トルコ人やタタール人の下で暮らした方がまだましである」⁽¹⁾。

この小論の目的は、ニコラウス・クザーヌスが長年にわたり東方に関心を抱いていて、この方面について集中的に研究したこと、そして、これらの関心と研究が、〈多様な儀礼のなかに一なる宗教が〉という注目すべき彼の思想を成立させるに際して重要な役割を果たしたこと、という二点を明らかにすることである。そこで以下に、クザーヌスによって描き出されたタタール人像に依拠しつつ、この思想成立の道筋を探索してみたい。

もし結論を先に記すことが許されるならば、驚くべきことに、そしてパラドキシカルにも彼は、上で言及したヨーロッパ中世末期の、タタール人をめぐる否定的な意味環境を、1453年の著作 *De pace fidei* (信仰の平和)⁽²⁾において超出しているばかりか、むしろその意味を逆転させさえして、タタール人に決定

的に重要な役割を担わせているのである。

I. タタール人に対するクザーヌスの長期にわたる関心

彼はすでに最初期の二つの説教においてタタール人に言及している。1430年12月になされた *Sermo I* で彼は、神について多様な名称が用いられていることに論及しながら、以下のように説いている。「ギリシア人は一なる神について幾つかの名称をもっている。例えば、その権能にちなんで『イスキュロス』、その支配にちなんで『キュリオス』、そしてもっとも本来的には『テオス』と名付けている。そしてラテン語の『デウス』は、この『テオス』に由来しているのである。またタタール語では彼は『ビルテンゲル』と呼ばれているが、それはつまり一なる神という意味である。ドイツ語では〈*ein got*〉というが、つまり『一なる善』という意味である。……このように、一なる神が、その多様な属性に応じて、多様な民族によって別々の名称を付与されているのである。しかしながら彼は、あらゆる民族においてあらゆる名称で表現されても、一なるものである」⁽³⁾。

翌1431年1月になされた *Sermo II* で彼は、神の子としてのキリストの存在を論じつつ、以下のように言及している。「神の子キリストが処女マリアから生れたことが世界中で信じられている。これを信じているのは、インド人、ムハンマド教徒、ネストリウス派、アルメニア人、ヤコブ派、ギリシア人、およびわれわれのような西洋のキリスト教徒である。タタール人でさえもこれを非難することはない。そればかりが彼らは、これへの信仰を公言しているわけではないものの、皆で信じているのである。つまり、いにしえの人々が待望していた真正なるメシアとしてキリストが到来したことを信じていない民族は、今日、世界に存在しないのである——メシアはこれから到来するものであると信じているユダヤ人を除いて」⁽⁴⁾。

また、1433年から34年にまとめられたと推測されているクザーヌスの最初の

著作 *De concordantia catholica* (普遍的協和について) にも、タタール人への言及が見出される。「タタール人の王は、もっとも少ない威厳しかもっていない。なぜならば彼は、神の法にもっとも少なくしか一致しない法に従って統治しているからである。ムハンマド派の王はより大きな威厳をもっている。なぜならば彼は、旧約聖書の法と新約聖書の幾つかの法を尊重しているからである。キリスト教徒の王はもっとも大きな威厳をもっている。なぜならば彼は、自然法と旧約聖書および新約聖書の法、ならびに正統的信仰を受容しているからである」⁽⁵⁾。

ここで注目しておくべきことは、以上の三つの引用箇所におけるタタール人への言及が、たえず「タタール人でさえも」という語法とニュアンスを伴って、論証の最後の根拠として使用されていることである。この点において、若きクザーヌスにとってタタール人とは、冒頭で言及した同時代の意味環境と同様に否定的な意味をもった存在であったことになる。

II. 『信仰の平和』第16章におけるタタール人知者とパウロとの 討論のための三つの前提

しかしその後タタール人は、クザーヌスの思想世界において、具体的には1453年の著作『信仰の平和』において、実に意味深い役割を配当されることになる。この役割を考察するためには、先ず三つの前提を考慮に入れておかねばならない。第一に、コンスタンティノーブルが同年にイスラーム・トルコの軍事的攻勢によって陥落したという、西洋キリスト教世界にとって一大事件が出来たということである⁽⁶⁾。第二には、この歴史的事態に動機付けられて執筆されたこの著作においてクザーヌスは、宗教迫害がこれほどに残酷になっている理由を諸々の宗教の間での儀礼の多様性であると考えていることである⁽⁷⁾。

第三には、全能者の主宰のもとに開催される天上での会議に参加する知者たちの資格である。諸々の王たちの王、すなわち神は「あらゆる国民および言語

を司っている天使たちを召集して、その各々に対して、各自が一人ずつ、できるだけ経験豊かな者を、肉になった御言葉のもとに連れてくるように指示した」⁽⁸⁾。こうしてあらゆる国民から呼び集められた経験豊かな代表者たちは、御言葉によって「知者」*sapientes* あるいは「知恵を愛する者」*sapientiae amatores* と名付けられた上で⁽⁹⁾、御言葉や使徒たちに問いかねられながら様々な問題について討論するのである。このような状況から判断すれば、この会議に召集された人々は、天使の指導の下にあるそれぞれの国民の中の最もすぐれた人物であるとみなすことができる。それゆえにさらに、この知者たちは神の知恵の一種の顕現であるともとらえることができる。なぜならば、クザーヌスはギリシア人の知者に次のように言わせているからである。「知恵を分有しているゆえに知者は数多く存在するのですが、知恵そのものは単純で分割不可能なものとして自己のうちにとどまっているのです」⁽¹⁰⁾。

同時に見過ごしてはならないことは、クザーヌスによって巧みに構想された天国での会議における討議の構造である。すなわち、あらゆる国民と言語を司っている天使たちがこの会議に臨席しているにもかかわらず、彼ら自身はいっさい討議に加わることがなく、討議に加わるのは知者たちだけである。この事実は次のような意味をもっているだろう。どの知者も人間として各自の民族伝統に深く根ざしていると同時に、「この感覚的世界では何ものも確固として存続することはなく、また意見や憶測は流動的であって時間によって変化するのであり、それは言語や意味の理解でも同様で」⁽¹¹⁾あるゆえに、つまり、このような典型的に人間的な特性があるからこそ、個々の知者が御言葉あるいは使徒たちと様々な問題について議論して、その結果、各自の見解が変化し、はじめは多様であった見解が最終的には一致するに到る可能性が開かれていることになるのである。この意味においてこそ、諸民族の代表である知者が集う天上での会議が存在意義を有するのである。他方、神に近い存在としての天使たちにはこのような役割はそもそもふさわしくないのである。

実際、知者たちのこのような要素は、タタール人の知者とパウロとの討論の際に大きな役割を果たすのであるが、それは後の考察で明らかになるであろう。

Ⅲ. 『信仰の平和』第16章におけるタタール人の知者

この書物には全部で17人の知者たちが登場するが、タタール人の知者はその中の14番目として、この書物のほとんど最後である第16章に登場する。彼はまず次のように言う。「これまで自分が知らなかったことを私はたくさんここで聞きました。タタール人は人口の多い素朴な民族ですが、一なる神を最大限に崇拝しているので、自分たちと共に一なる神を崇拝している他の人々の許で、儀礼が多様であることに驚いています。彼ら〔タタール人〕は、キリスト教徒のうちのある人々およびアラブ人とユダヤ人のすべてが割礼を施されていること、またある人々が顔に焼印を押されていること、また、ある人々が洗礼を受けていることを嘲笑しています。……犠牲に関しても、その儀礼はいちいち述べきれないほどに様々です。これらの多様な儀礼の中でも、キリスト教徒のあの儀礼は嫌悪すべきもののように思われます。というのも、そこではパンとぶどう酒が供された上で、それがキリストの体と血であるとされて、犠牲奉獻の後にそれを彼らは食べたり飲んだりするのですから。つまり、彼らは崇めるものを貪り食うのです。場所と時によってかくも多様になっているこれらのこと〔儀礼〕のなかに、いったいどのようにしたら合一が成立しうするのか、私には分かりません。そして、それが成立しなければ、迫害も止むことがないでしょう。相違こそが分裂と敵対を、また憎しみと戦争を引き起こすのですから」¹²⁾。

以上の引用に関して先ず確認しておきたいことは、他の民族の知者たちと比較した場合に異例なことに、ここでタタール人の知者は自分の民族の特性について論及して、彼らは人口の多い単純な民族であるが、一なる神を最大限に崇拝している、と述べていることである。タタール人以外には自分の民族につい

て語るのはインド人知者だけであるが、彼はこう言う。「インド人は知恵ある人々であり、宗教にとって必要不可欠なものは唯一神の祭式のなかにこそ存在するということを、躊躇なく認めています」⁽¹³⁾。タタール人とインド人の知者は共に自己の属する民族について言及しているものの、その内容に相違が存在することは、容易に認識できるであろう。すなわち、後者は自己の民族についてかなりの自負を示しているのに対して、前者はおおいに慎み深く、かつ自己の民族を批判的にさえ見ているのである。このようなタタール人の知者の発言は、事実の指摘であるのみならず、この知者自身の内的態度の現われでもあるに違いない。なぜならば、彼は自己の意見表明の冒頭において、「これまで自分が知らなかったことを私はたくさんここで聞きました」と率直に自らの無知を告白していたが、これはクザーヌスに特有の思想である〈docta ignorantia 覚知的無知〉の実践であって、タタール人知者はこの思想を自己のものとするにおいて、真理へと近づく条件を整えたことになっているはずだからである⁽¹⁴⁾。

IV. 〈素朴なタタール人〉

既にみたように、クザーヌスの描くタタール人の代表者は、タタール人が単純な民族であることを自認していたが、この見解はこの知者によって繰り返されている⁽¹⁵⁾。しかしこのような「タタール人は素朴である」とする知者の告白は、この著作においては、後に明らかになるように、むしろ肯定的な意味をもっているように思われるのである。

ところで、タタール人が素朴な民族であると言うとらえ方は、クザーヌスに先立つ、マルコ・ポーロのいわゆる『東方見聞録』における報告の全体および別の逸名の修道僧による報告⁽¹⁶⁾からも容易に導きだされるものである。しかしながら、この関連で考察の対象から外すことのできないものは、クザーヌスとその写本を所有していたモンテクルチスのリコルドゥスによる報告である。そ

こには、タタル人が素朴な民族であることを指摘する、次のような極めて否定的な描写がある。「タタル人は救済からもっとも離れているように思われる。なぜならば、彼らは、本末転倒した習慣のゆえに彼らのもとでは墮落してしまっている自然法以外に、いかなる法も所有していないからである。彼らには断食もないし神殿も聖職もなく、犠牲もないし彼らを精神的生活に導く外的な補助手段もない。彼らには道德哲学も自然哲学もなく、礼儀作法も見知らぬ人に対する礼遇もなく、一定の場所に対する愛もない。彼らは土地を耕すことも種を蒔くことも樹木を育てることもせず、家を建てることもしない」¹⁷⁾。

このような“野蛮なタタル人”像とは対照的に、クザーヌスにおけるタタル人は、素朴で実直な民族として描かれているのである。つまり、クザーヌスはリコルドゥスの報告を利用しながらも、タタル人が素朴であることを肯定的な意味に解釈し直しているものであり¹⁸⁾、それゆえにタタル人の知者には、ナイーブではあるがそれだけに事態の核心を突く問いを、諸民族の教師たるパウロに対して次々と提出させているのである。この点については、Ⅵ節以下で検討してみよう。

V. 〈タタル人は一なる神を最大限に崇拝している〉

タタル人が一なる神を信じているという報告は、クザーヌスに先立ついくつかの情報源に見出される。前出のリコルドゥスはこう記している。「しかしながら彼ら〔タタル人〕は一なる神が存在することを信じており、ある種の仕方で見世と同じく〔墮落した〕生に復活することを期待している」¹⁹⁾。またプラノカルピーニのヨハンネスは以下のように報じている。「彼らは一なる神を信じており、彼があらゆる可視的なものと不可視なものとの創造主であること、ならびに彼がこの世における善きことどもと食べ物との授与者であることを信じている。……しかしながら彼らは、人間の形に似せて作られたフェルト製の偶像の類を所有しており、これらを彼らの滞在場所の入口の両側にかけてお

くのである」⁽²⁰⁾。C. de Bridia とだけ知られる修道僧の報告も、次のように非常に類似した内容である。「彼らは、可視的なものと不可視なものとの創造主であり、この世における善きことどもと悪しきことどもとの授与者である一なる神を信じている。しかしながら彼らは、本来あるべき仕方では神を崇拝することはない。というのも彼らは様々な偶像を所有しているのである。人間の形をしたフェルト製のいくつかの偶像を、同様にフェルト製の乳房の上ののせて彼らの滞在場所の入口の両側にかけておく。これらのものが自分たちの家畜の保護者であり、自分たちにミルクと肉とをもたらしてくれるのだと、彼らは主張しているのである」⁽²¹⁾。タタール人が一なる神を信じているということは、1245年に開催された第1リヨン公会議の場でも当時のキエフ大司教ピエトロ・アケロヴィッチによって報告されたことがあった⁽²²⁾。

さらに、かつてはクザーヌスの所有になり、現在はロンドンに所蔵されているマルコ・ポーロの『東方見聞録』の写本 Kodex: Brit. Mus. Addit. 19952 には、以下のような報告がある⁽²³⁾。「タタール人は彼らがナチガイと名付けている一なるものを神として崇拝している」⁽²⁴⁾。「彼ら〔タタール人〕は彼らがワタガイと名付けている一なる神を崇拝している」⁽²⁵⁾。以上のような様々な情報を研究した上で、クザーヌスは自信をもってタタール人の知者に、「彼ら〔タタール人〕は一なる神を最大限に崇拝している」と言わせているのであろう。

Ⅵ. 〈彼らは、自分たちと共に一なる神を崇拝している他の人々の許で儀礼が多様であることに驚いています〉

先の引用から明らかなように、タタール人は極めて単純な儀礼をもって一なる神を崇拝しているとされている。タタール人の知者が、同じ一つの世界において同じ神に捧げられる儀礼が多様であることに驚くその驚きは、この自分たちの単純な儀礼が根拠となつて、いっそう強調されているに違いない。また、キリスト教の儀礼である聖体拝領に対する彼の違和感は、ミルクと肉を供物と

して捧げるものの、自分たちはそれらを飲んだり食べたりすることはないという、タタール人の儀礼体験から引き起こされているのであろう。

さらに彼は上に引用した発言において、とりわけ以下の二点を強調している。第一に、儀礼というものが時と所によって多様であり、第二に、このような儀礼の多様性が宗教的迫害の原因となっている、ということである。さらに注目すべきことには、彼がここでいわば大天使の代理を務めているかのような重要な役割を果たしていることであるが、それは、以下のような本書における論展開を考慮すると明らかになる。すなわち、上掲の引用でタタール人が述べている内容は、天国の会議の冒頭で既に大天使が神に向かって訴えたことである⁽²⁶⁾ばかりか、さらに、この著作の最後に、世界中の書物を調査した結果のいわば締めくくりの言葉として以下のように記されることでもある。「それらを閲読してみると、あらゆる相違は結局、唯一の神の崇拜のうちに存在していたというよりも、むしろ儀礼のうちにこそ存在していたことが明らかになった」⁽²⁷⁾。もう一つの注目すべきことは、タタール人の果たしている役割が、同様に異教徒であるトルコ人のそれとはまったく異なっていることである。後者はタタール人よりも前に話すのであるが、わずかなことを語るに過ぎない⁽²⁸⁾。ここにもクザーヌスの描くタタール人像の特殊性が見てとれるであろう。

つまるところタタール人の知者は、パウロとの討論において、一なる神への信仰とそれに結びついている多様な儀礼との関係を根本的に説明することが可能となる理論的な出発点を措定する、という重要な任務を担っているのである。そしてパウロは、このタタール人によって提示された問に対して、次のような極めて重要な理念をもって回答するに到るのである。

Ⅶ. 〈救済が明らかにされるのは業^{わざ}によってではなくて信仰によってである〉

諸民族の教師であるパウロは、御言葉の依頼に基づいて先ずこう発言する。

「救済が明らかにされるのは、業によってではなくて信仰によってである、ということが示されねばなりません」⁽²⁹⁾。このパウロの発言は、信仰と儀礼とを区別するための重要な前提となる。なぜならば、儀礼は行為であるかぎり人間の業に属するものであり、従って魂の救済に対して決定的な役割を果たすことができないからである。こうして、タタール人の知者を驚かせた儀礼の多様性が、魂の救済という信仰本来の目的達成のためには大きな意味をもつことがなくなるのである。

しかしながら、儀礼は信仰とまったく関係がない、とここで主張されているわけではないことにも、留意しておかねばならない。すなわち、少し後の個所でタタール人とパウロとの間には以下のような対話がなされている。「タタール人：……信仰だけで十分であるのかどうか、教えてください。パウロ：……それ〔信仰〕は愛によって生かされたものでなければなりません。なぜならば、業なしには信仰は死んでいるのですから。タタール人：それはどんな業ですか。……パウロ：……神の命令はきわめて簡単で万人によく知られているのであり、またそれは諸国民すべてに共通です。さらに、それをわれわれに明らかにするものとしての光は、理性的魂と共に創造されているのです。なぜならば、神はわれわれのうちで、われわれが存在を受け取る源としての彼〔神〕を愛すべし、と語りかけ、また、われわれが自分になされるのを望むことをだけをほかの人になすべし、と語りかけているからです」⁽³⁰⁾。

この対話において強調されているのは、第一に、信仰は愛によって生かされねばならないということ、第二には、人が従うべき神の命令をこの愛が示しているということ、第三に、この命令を知らしめる光はあらゆる国民に対して、すなわち単純素朴なタタール人に対してさえも賦与されているということである。

VIII. 〈変化を受け容れるものはしるし **signa** であって、しるしで表されるもの **signatum** ではない〉

パウロの第二の発言はこうである。「それら〔儀礼〕は信仰の真理の感覚的なしるしとして定められ採用されているのです。つまり、変化を受け容れるものはしるし **signa** であって、しるしで表されるもの **signatum** ではないのです」⁽³¹⁾。もちろんこれは、儀礼が時と所によって極めて多様であるという事実には驚き、疑義をも抱いたとする、タタール人の意見に対する答えである。つまりこのパウロの発言は、たしかに儀礼の多様性が宗教上の迫害の原因となっているとしても、そのことが直ちに、世界中で告白されている一なる神への信仰を損なうものではけっしてない、という主張の理論的根拠となりうるのである。なぜならば、すでに上で言及したように、儀礼とは信仰の真理がく感覚で把握されうるしるし〈 **signa sensibilia** 〉としてこの世界に導入され受容されているものであって、さらに、これも以前に言及したように、そもそもこの世界では「なにものも確固として持続することはない」のであり、それゆえに儀礼も同様だからである⁽³²⁾。

純理論的な視点から見れば、この事態は理解しやすい。すなわち、ここには、「言葉の多様性は、一つの精神のさまざまな顕示にほかならない」⁽³³⁾ という、クザーヌスの『神学綱要』の一節を適用することができるのである。

以上のわれわれの考察を、この節で示したパウロの発言を基礎にして考察し直すならば、以下のようにまとめることが許されるであろう。一なる神への信仰は、個々の国民における儀礼がいかに多様であろうとも、それとは無関係に成立し続けることが可能である。なぜならば、人間の業の結果である諸々の儀礼は、神の命令に従ってそれぞれの国民の間でこのように相違しているものであって、各々の国民が彼らに賦与された光を用いてそれらを受容しているものとして、現にある儀礼なのである。従って、神への信仰においては、儀礼とい

う外的な形式はもはや決定的に重要なものではない。こうして、儀礼に関する寛容への前提が、パウロとタタール人知者によって創出されたのである。それゆえに当然にも、タタール人に関するこの章が、タタール人によって提出された儀礼についての問いに導かれる形で、パウロの次の言葉で締めくくられるに到るのである。「人々が互いに儀礼を耐え忍ぶことによって、信仰と愛の律法における平和が確立されるならば、それで十分でしょう⁽³⁴⁾」。

IX. 〈多様な儀礼のなかに一なる信仰が〉

こうして、〈儀礼の多様性のなかに唯一の宗教が存在する〉⁽³⁵⁾という命題が確証される。これは、天的存在たちが集う会議の論題としてこの著作の冒頭で提出されていたものである。

実はわれわれは、このようなクザーヌスの理念に極めてよく似た思考法を、既に冒頭で言及した報告、すなわちリコルドゥスの『道程』に見出すことができる。しかし、この報告で論じられているのは、次に示すように、キリスト教内部での儀礼の多様性である。「たとえ彼ら〔異なった宗派の人々〕がその儀礼においてわれわれと一致しないとしても、彼らが信仰においてわれわれと一致しているかぎり、その不一致は危険ではない。なぜならばキリスト教徒の信仰は一なるものなのだからである。それゆえにこそ使徒〔パウロ〕は『エフェソの信徒への手紙』四章〔5－6〕で「神は一人、信仰は一つ」と言ったのである。しかし彼は『儀礼は一つ』とは言っていない。それにもかかわらず、われわれの兄弟達は彼らと、多様な儀礼をめぐる争っているのである——兄弟たちは、彼らを信仰における一致に導かねばならないのであって、儀礼における一致に導かねばならないわけではないのにもかかわらず」⁽³⁶⁾。

このリコルドゥスの引用のうちの第一の文章と類比的な構造をもっているのが、クザーヌス自身による次のような主張である。「一つの儀礼が危険性なしに多様であることができることを疑う者はいない」⁽³⁷⁾。この二つの文章に内容

的にも形式的にもこれほどの密接な関係がみてとれるという事実は、クザーヌスガリコルドゥスの報告に含まれている着想から影響された可能性を示唆している。

この点に対する影響については、さらに別の例を挙げることできる。すなわち、ハイデルベルク版『信仰の平和』の序文に引用されている著者逸名の著作『ムハンマドの法または教説』*Lex sive doctrina Mahumeti*である。この書物には、異なった宗教、とりわけユダヤ教とイスラームにおける儀礼の多様性について、以下のように記されている。「あるユダヤ人がムハンマドに尋ねた。『ではあなたは、あなたに先立つ預言者たちについて何と言いますか』。後者が答えた。『確かに万人の法あるいは信仰は一つである。しかし異なった宗教における儀礼は疑いもなく多様である』と」。この個所の欄外にクザーヌスは「信仰は一つ、儀礼は多様」と記しているというのである⁸⁸。したがって、クザーヌスが上掲の定式についての重要なヒントをこの文章から得たことも、大いに想定されるのである。

以上のようなわれわれの考察によって、次のことが明らかになる。まず最初はキリスト教内部での寛容の理念が提唱され、それが普遍的寛容の理念にまで展開してゆく一つの道筋が、リコルドゥスから逸名著者を経てクザーヌスに到る形で見出される。そしてその最後の段階は、既成観念に囚われることが少なかった思想家ニコラウス・クザーヌスによって用意された。その際に彼の思考においては、1430年代の末期に彼によって紡ぎ上げられた〈ドクタ・イグノラントィア〉(覚知的無知)の思想が、タタール人知者の発言に表現されているとおりに、生き生きと脈打って彼の思惟を支えていた、とみなすことができるであろう⁸⁹。

X. 〈あらゆる民族が彼において神の祝福を得る〉

さらに、タタール人の存在に関して、同じ章の第58節にあるパウロの以下の

ような発言にも、ここで言及しておく必要がある。「神はアブラハムに対して、イサクという一人の子孫を与えることを、そしてそのイサクという子孫においてあらゆる民族が祝福されるようになることを約束したのです。……そこで〔イサクを神に差し出したとき〕彼〔アブラハム〕は義とされ、彼に由来してイサクを通して下ってくる一人の子孫において、あの約束は成就されたのです」。この発言を聞いてタタル人は尋ねる。「その子孫とは誰のことですか」。パウロは答える。「キリストです。すなわち、彼においてすべての民族が神の祝福を得るのです」⁽⁴⁰⁾。印象的なことは、この小さな節でパウロが、一なる神への信仰によってすべての民族が祝福され得るということを、繰り返し言明していることである。この発言で意図されているのは、タタル人のような民度の低い素朴な民族であっても、等しく神によって祝福され得ることを確認することであろう。

XI. タタル人の家庭内奴隷

タタル人の存在は、ニコラウス・クザヌスにとって本来は遠いものであったはずだ。彼らの国は、コーカサスの彼方にあったからである。ところが当時、彼のすぐ近くにも、少数ではあるがタタル人が生きていた。このタタル人を見出すためには、身近に視線をめぐらすだけで十分だった。というのも、当時のイタリアにはタタル人が家庭内奴隷として生きていたからである。この事実を研究したのは、I. オリゴである⁽⁴¹⁾。彼女の研究によると、この種の奴隷は、大多数がタタル人であり、ロシア人、サーカシア人、ギリシア人、ムーア人、エチオピア人も少数いたという。トスカナ地方の裕福な貴族や商人は、どの家でも少なくとも二人あるいは三人のこういう奴隷を所有していた⁽⁴²⁾。現在にいたるまでフィレンツェには、人相書きを伴った当時の奴隷の台帳が残されている。たとえば1372年のタタル人の少女についてのものとして、以下のような記録がある。「身の丈は中くらいで、肌はオリーブ色で天然

痘の痕がたくさんあり、左の頬に二つのほくろがあり、唇は厚い」⁴³⁾。

これらの家庭内奴隷は人格としてではなく完全に物とみなされていた。それは、1401年のピサ市の財産目録が示している。そこには、一人の奴隷の価値が幾頭かの家畜と並べて書きこまれており、「この主人は女奴隷を1名、馬1頭、ろば2頭、雄牛の4分の3を所有している。これらをわれわれは総額70フロリンと評価する」とされているのである⁴⁴⁾。

オリゴはこの奴隷たちの使う言語についても述べている。「これらの奴隷たちは、彼らが用いる奇妙な言語で他の住民たちと区別されていた。彼ら同士は、半分は理解不能な方言で、あるいは肯定的に表現すれば、彼ら独自のジャルゴンで語り合っていたようだ。…それはある種のピジン・トスカナ語であり、そのなかにはタタール語やサラセン語の単語が混じっていた」⁴⁵⁾。

クザーヌスもパドゥアでの学生時代以来、この種のタタール人を目にしていたはずである。オリゴの研究によれば⁴⁶⁾、アエネアス・シルヴィウス・ピッコローミニ、後の教皇ピウス二世も黒人の家庭内奴隷を一人所有していたという。彼はクザーヌスの長年にわたる友人であった。ブルクハルトもこれに類することを、古典的な著書『イタリアルネッサンスの文化』のなかで記述している。それによれば、1488年（クザーヌスの死から約20年後）のことであるが、教皇イノケンティウス八世はフェルナンド・カトリック王から贈り物としてもらった奴隷100名を、枢機卿や他の貴顕におすそ分けをしたという⁴⁷⁾。

ところで、われわれがこの考察の主たる素材としてきた『信仰の平和』の冒頭には、奴隷としての現状のゆえに神を探究することが不可能となっている人間一般についての論及が、大天使の言葉として以下のように見出される。「主よ、あなたは知っておられます。この大群衆は大いなる相違無しには存在しないことを、さらに、ほとんどすべての者が辛苦と悲慘に満ちた困難な生活をおくことを強いられており、彼らを支配している王たちの奴隷として従属することを強いられているということ。それゆえに、これらすべての者の中で

ほんのわずかな者しか、その自由な意志を用いて自分自身を認識することに到達できるだけの閑暇がもてないのです。多くの者たちが〔自分の〕肉体の配慮と奴隸的使役によってかき乱されており、したがって隠れたる神であるあなたを探求することができないのです」⁽⁴⁸⁾。これは、上で言及した当時の家庭内奴隸の境遇を、神との関係における大多数の一般民衆のものとして、位相を一段ずらして描写したものととらえることができるだろう。このずらしで想定されている構造は、先にわれわれが論及した、既成の宗教が一なる真の宗教との関係において後者の儀礼として位置付けられたものと同様なものである⁽⁴⁹⁾。

もし、これまでのわれわれの考察で明らかにされた『信仰の平和』においてタタール人の果たしていた重要な役割と、イタリアにおいてクザーヌスが身近に経験していた現実のタタール人奴隸の低い地位とを、さらに、I節における考察が示していたような三十代のクザーヌスがタタール人に対して配当していた貧弱な役割とを比較考量するならば、われわれは驚かされつつも、次のように言うことにためらいを覚えることはない。ニコラウス・クザーヌスは、二重の意味で自分にとって〈遠い〉——すなわち地理的にもまた社会階層的にも遠い——存在であるタタール人を、クザーヌスの意味での〈イディオータ〉⁽⁵⁰⁾という重要な役割を果たさせるべく、この著作において入念に描き上げているのである。ここにも、われわれが「楕円の思考」と名付けるクザーヌスの思考が典型的に現われている。これは、二つの対立する極すなわち立場が思惟のなかで互いに歩み寄り、一致するか、少なくとも調和に到る思考の営みである⁽⁵¹⁾。そして、これは総体として、真の意味での、またそれゆえに現代にも妥当する、寛容の思想の基盤を形成しているのである。

* 本稿は、『峰島旭雄教授記念論集 東西における知の探究』（北樹出版、1998年）にドイツ語で発表した小論に、大巾に加筆し、補正したものである。

- 注⁽¹⁾ Martin Luther, Tischrede 2, 73 [Joh. Walch (hrsg.), *Dr. Martin Luthers Sämtliche Schriften* (Groß Oesingen 1880-1910) Bd. 22, S. 98].
- (2) この書物には以下の日本語訳がある。八巻和彦訳『信仰の平和』（小山宙丸監修『中世末期の神秘思想』[『中世思想原典集成』（平凡社刊）第17巻]所収）。
- (3) 以下、クザーヌスの著作はハイデルベルク版全集に従って引用し、その巻をhで示す。
Sermo I, n.5, 1- 6; 11-13 [h XVI, 1, p.6]: Habent itidem Graeci unius Dei diversa nomina, puta «ischyros» iuxta potentiam, «kyrios» iuxta dominationem, et proprie vocatur «theos». Ita et latine a «thoes» «deus» derivatur, et tartarice «birtenger», id est «unus deus», et almanice «ein got», id est «eine gut». ... Ita unus Deus secundum attributa diversa a diversis gentibus aliter et aliter nomen sortitur, licet sit unus in omnibus et per omnia.
- (4) *Sermo* II, n. 8, 4- 14 [h XVI, 1, p.25]: Creditur enim per universum mundum Christum Dei filium de virgine natum. Hoc credunt Indi, hoc Machmetani, hoc Nestoriani, hoc Armeni, hoc Jacobini, hoc Graeci, hoc Christiani occidentales, ut sumus nos. Hoc Tartari non inficiunt, immo communiter credunt, licet non advertant. Et nulla est hodie mundi natio, quin credat Christum verum Messiam, quem exspectabant antiqui, venisse exceptis Judaeis, qui eum tantum credunt venturum.
- (5) *De concordantia catholica*, III, c. VII, n. 348, 6 - 11 [h XIV, 3, p.359]: Et sic rex Tartarorum, quia per leges divinis institutis minime concordantes gubernat, minimus dicitur, rex sectae Mahometanae maior cum, veteris testamenti statuta ac certa novi veneretur, rex Christianorum maximus, cum tam leges naturae quam utriusque testamenti et orthodoxam fidem acceptet.
- (6) たとえばランシマンは「キリスト教世界がコンスタンティノーブルの陥落によって深刻な衝撃をうけたことはたしかである。当時の西方諸勢力は、賢明さ——それは今日にいたってわれわれが言いうるものだが——に欠け、トルコ族の征服がもはやいかに避けがたいものになっていたかがわからなかった。しかもなお、コンスタンティノーブル陥落という悲劇がおこったからといって、『東方問題』にたいする西方諸国の政策、いなむしろその政策不在が変わったわけではけっしてなかった。ただローマ教皇職位だけが心底から狼狽し、心底からこれへの対応策を計画した。そして、その教皇職位も、まもなく、より身近にいつそう切迫した諸問題をかかえることになった」としている。Cf. Runciman, Steven, *The Fall of Constantinople 1453* [Cambridge 1965] p. xii (訳『コンスタンティノーブル陥落す』[1969年、みすず書房刊] 2頁以下)。
- (7) *De pace*, I, n.1 [h VII, p. 3, 6f.] (八巻訳 584頁); n.6 [h VII, p. 7, 9-11] (八巻訳 587頁); III, n.9 [h VII, p. 10, 13f.; 17] (八巻訳 590頁)。
- (8) *Ibid.* III, n. 9 [h VII, p. 10, 7-9] (八巻訳 589頁): Et advocatis angelis qui omnibus nationibus et linguis praesunt, cuilibet praecepit, ut unum peritiorum ad Verbum caro factum adduceret.
- (9) *Ibid.* IV, n. 10 [h VII, p. 11, 12-14] (八巻訳 590頁以下): Vos enim qui nunc adestis, inter vestrae linguae consortes sapientes dicimini, aut saltem philosophi seu sapientiae amatores (今ここに出席している汝らは、汝らと言語を共にする者たちのなかでも知者と呼ばれており、少なくとも哲学者すなわち知恵を愛する者と称されているであろう)。
- (10) *Ibid.* n. 11 [h VII p. 12, 3f.] (八巻訳 591頁): cuius (sapientiae) participatione sunt multi sapientes, sapientia ipsa simplici et indivisa in se permanente.
- (11) *Ibid.* III, n. 8 [h VII p. 9, 18—p. 10, 2] (八巻訳 589頁): nihil stabile in sensibili mundo perseveret varienturque ex tempore opiniones et coniecturae fluxibiles, similiter et linguae et interpretationes.
- (12) *Ibid.* XVI, n. 54 [h VII p. 50, 14—p. 51, 9] (八巻訳 627頁): Audivi multa in hoc loco prius

incognita mihi. Tartari multi et simplices, unum Deum ut plurimum colentes, admirantur varietatem rituum aliorum etiam eundem cum ipsis Deum colentium. Nam aliquos ex Christianis, omnes Arabes et Iudaeos circumcisos, alios signatos in facie adustionibus, alios baptizatos derident. ... Inter quas varietates Christianorum sacrificium, ubi offerunt panem et vinum et dicunt esse corpus et sanguinem Christi, quod sacrificium ipsi post oblationem comedunt et bibunt, videtur abominabilius: devorant eum quem colunt. Quomodo in hiis quae etiam variantur ex loco et tempore posset fieri unio, non capio; et nisi fiat, non cessabit persecutio. Diversitas enim parit divisionem et inimicitias, odia et bella.

- (13) Ibid. VII, n. 20 [h VII p. 19, 18f.] (八巻訳 598頁): sapientes sint et necessitatem religionis in cultu unius Dei esse non haesitent.
- (14) *De docta ignorantia*, I, 26, (n. 89) [h I, p. 56, 16 ff.] (岩崎・大出訳 75頁): per quam (docta ignorantia) tantum ad infinitae bonitatis Deum maximum unitrinum secundum gradus doctrinae ipsius ignorantiae accedere posse explicavimus (これ〔覚知的無知〕によってのみ、われわれはこの無知の教えの段階に従って、無限な善性をもつ、最大で一にして三なる神へ近づくことができると、われわれは説明してきた)。
- (15) *De pace*. XVI, n. 58 [h VII p. 54, 4ff.] (八巻訳 630頁): Quomodo dabis simplicibus Tartaris intellectum huius, ut capiant Christum esse in quo assequi poterunt felicitatem? (あなたはいったいどのようにして、あの素朴なタタル人に、彼らが幸福を得ることができるのはキリストにおいてであるということを理解させるというのですか)。
- (16) これは1960年代に発見された著作 *Hystoria Tartarorum von C. de Bridia Monachus* である (刊本は以下のとおり: Alf Onnerfors (ed.), *Hystoria Tartarorum von C. de Bridia Monachus* [Berlin 1967]) この著作は、*Iohannis de Plano Carpini Liberum Tartarorum* と密接に関わっているという (cf. Onnerfors, p.VII)。しかしながら、この著作をクザーヌスが読んだことがあったかどうかは、不明である。私が初めて比較のために使用する。
- (17) Ricoldus de Monte Croce, *Itinerarium* (以下『道程』と表示), De tartaris (Dondaine, A. O. P., *Ricoldiana* - Notes sur les oeuvres de Ricoldo da Montecroce [in: *Archivum Fratrum Praedicatorum*, Vol. XXXVII (Roma 1967)]) p. 167, 11-18: "Tartari... plus omnibus videntur distare a salute pro eo quod nullam legem habent nisi nature, que etiam valde corrupta est in eis ex prava consuetudine: nec habent ieiunium, nec templum, nec sacerdotium, nec sacrificium, nec aliquod adminiculum exterius quod eos vite spirituali coniungat. Nec habent philosophiam moralem nec naturalem, nec urbanitatem, nec reverentiam ad aliquam personam extraneam, nec habent amorem ad aliquem locum, nec terram colunt, nec seminant, nec arbores plantant, nec domos edificant." この書物とマルコ・ポーロの『東方見聞録』の写本をクザーヌスが所有しており、かつ使用したことについては、*De pace fidei*, praefatio [h VII p. xxxviii] を参照。
- (18) リコルドゥスは、タタル人は文化の水準が低いので、容易にイスラーム化されると報告している。Cf. Ricoldus, op. cit. p. 167, 22f.: Tartari ergo faciliter efficiuntur sarraceni, et iam pro magna parte conversi sunt, immo perversi, ad legem sarracenorum propter largam vitam et consimilem resurrectionem.
- (19) Ricoldus de Monte Croce, *Itinerarium*, (Dondaine, A. O. P., *Ricoldiana* - Notes sur les oeuvres de Ricoldo da Montecroce) p. 167, 19f.: "Credunt tamen Deum esse et expectant quandam resurrectionem ad istam eandem vitam."
- (20) Iohannes de Plano Carpini, *Ystoria Mongalorum* (Cod. Cus. 203, 91v, 19-92r, 1) (Sinica Franciscana, vol.1 (1929) S.36, c.III, 2), (Cf. *De pace fidei*, Editorum Adnotatio 34 [h VII, 86, 18ff.]):

"Unum Deum credunt, quem credunt esse factorem omnium visibilium et invisibilium, et credunt ipsum tam bonorum in hoc mundo quam penarum esse datorem. ... Nichilominus habent ydola quaedam de filtro ad ymaginem hominis facta, et illa ponunt ex utraque parte hostii stationis."

- (21) *Hystoria Tartarorum* von C. de Bridia Monachus, n.39, 47-54 [p. 25]: "Credunt tamen vnum deum creatorem rerum visibilium et invisibilium et datorem bonorum in hoc seculo pariter et malorum. Nec tamen ideo eum venerantur sicut decet, habent enim ydola diversa. Quasdam ymages hominum de filtro habent quas ponunt ex utraque parte hostii stationis super ubera de filtro similiter, et has affirmant esse custodes pecorum et eis offerunt lac et carnes."
- (22) L. N. Gumilev (Tr. by R. E. F. Smith), *Search for an Imaginary Kingdom, The legend of the kingdom of Prester John* [Cambridge & other places 1987] p. 368.
- (23) クザーヌスはこの書物の写本に1446年に注をつけた。Cf. *Acta Cusana*, I, 2. Nr. 150, p. 505.
- (24) *Londoner Kodex*, Brit. Mus. Addit. 19952, 26^r 1: "Tartari pro deo colunt unum quem vocant naczgay."
- (25) *Ibid.* 83 r, 11f.: "deum unum colunt quem vatagay vocant." 注(23)と(24)で示されている二つの文章は、今日流布している版では異なりは僅かである。第一の文章は: "They say that there is a High God, exalted and heavenly to whom they offer daily prayer with thurible and incense, but only for a sound understanding and good health. They also have a god of their own whom they call Natigai. They say that he is an earthly god and watches over their children, their beasts, and their crops." (Latham's Edition, p. 80) 第二の文章は: "You must understand that they make one of their gods of felt and call him Natigai." (Latham's Edition, p. 281)
- (26) *De pace*, I, n. 6 [h VII, p. 7, 19-15] (八巻訳 587 頁)。
- (27) *Ibid.* XIX, n. 68 [h VII, p. 62, 13f.] (八巻訳 638 頁): Quibus examinatis omnem diversitatem in ritibus potius compertum est fuisse quam in unius Dei cultura.
- (28) *Ibid.* XIV [h VII n. 47, p. 44, 3-6] (八巻訳 620 頁): 「依然として少なからぬ相違が残っています。キリスト教徒は、キリストがユダヤ人によって十字架にかけられたと言っていますが、ほかの人々はそれを否定しています」。
- (29) *Ibid.* XVI, n. 55 [h VII p. 51, 12f.] (八巻訳 627 頁): Oportet ut ostendatur non ex operibus sed ex fide salvationem animae praestari. なお、この主張がすぐ後でタタル人とパウロの二人で以下のように繰り返されていることも留意しておきたい。*Ibid.* XVI, n. 58 [h VII p. 54, 1-3] (八巻訳 630 頁): Tartarus: Vis igitur quod sola fides illa iustificet ad perceptionem aeternae vitae? Paulus: Volo. (タタル人: それではあなたは、この信仰のみが永遠な生を確保できるように義とするといいたいのですか。パウロ: その通りです)。
- (30) *Ibid.* XVI, n. 58f. [h VII p. 54, 22—p. 55, 14] (八巻訳 631 頁): quaero, si fides sufficit. Paulus: ... Oportet autem quod fides sit formata; nam sine operibus est mortua. Tartarus: Quae sunt opera? ... Paulus: ... Divina mandata brevissima et omnibus notissima sunt, et communia quibuscumque nationibus. Ymmo lumen nobis illa ostendens est concreatum rationali animae. Nam in nobis loquitur Deus, ut ipsum diligamus a quo recipimus esse, et quod non faciamus alteri nisi id quod vellemus nobis fieri.
- (31) *Ibid.* XVI, n. 55 [h VII p. 52, 1f.] (八巻訳 628 頁): ut signa sensibilia veritatis fidei sunt instituta et recepta. Signa autem mutationem capiunt, non signatum.
- (32) 上注(1)参照。
- (33) *Compendium*, VII, n. 20 [h XI 3, p. 16] 10f. (大出・野沢訳 38 頁): Nec varietas verborum aliud est quam unius mentis varia ostensio.

- (34) *De pace* XVI, n. 60 [h VII p.56, 18f.] (八巻訳 632 頁): Sufficiat igitur pacem in fide et lege dilectionis firmari, ritum hinc inde tolerando. なおタタール人が他の宗教に寛容であることは、先行文書が報告していた。マルコ・ポーロ『東方見聞録』(愛宕訳 I, 188頁以下): 「彼〔カーン〕は盛大な儀式を催して自ら何回も福音書に焼香した後、敬虔な態度で吻をこれに当て、かつ居並ぶすべての重臣・貴族にも命じて彼にならわしめた。この儀式はクリスマス・復活祭といったようなキリスト教徒の主要祭典に際してはいつも挙行される例であった。しかしカーンはイスラーム教徒・偶像教徒・ユダヤ教徒の主要聖節にも、やはり同様に振舞うのだった」。さらに以下の研究書にも、タタール人が仏教、イスラーム、ユダヤ教、そしてキリスト教のあらゆる信条に寛容であることを、タタール人に接触した13世紀のヨーロッパ人が学び知ったという指摘がある: Newton, A. P., *Travel and Travellers of the Middle Ages* [London 1926], p.127.
- (35) *Ibid.* I, n. 6, [VII p.7, 10f.] (八巻訳 587 頁): Si sic facere dignaberis, cessabit gladius et odii livor, et quaeque mala; et cognoscent omnes quomodo non est religio una in rituum varietate.
- (36) Ricoldus, Op. cit., *Regule generales* (A. Dondaine, O.P., *Ricoldiana*) p. 169, 18-22: licet non concordent nobiscum in ritu non est periculum dummodo concordent in fide, quia fides christianorum est una, unde Apostolus Eph. 4 «Unus Deus una fides», non dicit unus ritus. Fratres autem sepe contendunt cum eis inutiliter de diversitate ritus cum habeant eos reducere solum ad unitatem fidei non ad unitatem ritus.
- (37) Epist. II, De usu communibus ad Bohemos: varium posse ritum esse sine periculo nemo dubiat.
- (38) h VII, xxxix, 5-8: in quo libro Cusanus legit: «Quid ergo dicis de prophetis qui te praecesserunt?» Respondit: «Lex quidem sive fides omnium una; sed ritus diversorum nimirum diversi»; et in margine adnotavit: «fides una, ritus diversus.»
- (39) この著作における〈覚知的無知〉思想への論及は、上述のタタール人の発言以外にも、例えば次の個所に見出される: *De pace* I, n. 5 [h VII, p. 6, 16—p.7, 8] (八巻訳 586 頁以下); *Ibid.* VII, n. 21 [h VII, p. 20, 10ff] (八巻訳 598 頁以下); *Ibid.* XII, n. 36 [h VII, p. 36, 5-9] (八巻訳 613 頁以下)。
- (40) *De pace*. XVI, n. 57, [h VII p. 53, 5f.; 13-18] (八巻訳 632 頁): Paulus: «Deus promist Abraham quod daret sibi semen unum in Ysaac, in quo semine benedicerentur omnes gentes. tunc iustificatus est Abraham et adimpleta promissio in uno semine, quod ab eo per Ysaac descendit.» Tartarus: «Quod est illud semen?» Paulus: «Christus. Omnes enim gentes in ipso assequuntur divinam benedictionem.»
- (41) Iris Origo, *The Domestic Enemy: the eastern slaves in Tuscany in the fourteenth and fifteenth centuries*, in: *Speculum* vol. XXX, No. 3 (July 1955) pp. 321-360.
- (42) *Ibid.* p. 321.
- (43) *Ibid.* p. 327.
- (44) *Ibid.* p. 324.
- (45) *Ibid.* p. 328.
- (46) *Ibid.* p. 355.
- (47) Jacob Ch. Burckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien* [Bern 1943] IV, 3. Die Naturwissenschaft in Italien, Anm. 25, S. 307 (柴田訳 339頁)。
- (48) *De pace* I, n. 4 [h VII p. 5, 11-18] (八巻訳 586 頁以下): nosti, Domine, quod magna multitudo non potest esse sine multa diversitate, ac quod laboriosam aerumpnis et miseriis plenam paene omnes vitam ducere coguntur, et servili subiectione regibus qui dominantur subesse. Ex quo factum est, quod pauci ex omnibus tantum otii habent, ut propria utentes arbitrii libertate ad sui notitiam

pergere queant. Multis enim corporalibus curis et servitiis distrahuntur; ita te, qui es Deus absconditus, quaerere nequeunt.

- (49) 宗教と儀礼についてのこの点に関する考察は以下の論文を参照されたい：八巻和彦「クザーヌス哲学における宗教寛容の思想」(工藤他編『哲学思索と現実の世界』(1994年, 創文社刊), とくに129-134頁。
- (50) この点について詳しくは, 以下の論文を参照されたい：八巻和彦「ニコラウス・クザーヌスの *Idiota* 篇における〈idiota〉像について」(『和歌山大学教育学部紀要』人文科学, 第30集, 1981年, 1-15頁。
- (51) この点についても詳しくは, 以下の論考を参照されたい：八巻和彦『クザーヌスの世界像』(創文社刊) 233-241頁。